

「(タイ・チュラロンコン大学サマースクール) 参加報告書」

京都大学文学研究科修士1年 郭昶

タイ・チュラロンコン大学サマースクールに参加する前は、初めての日本人大学生との合宿ということもあり、うまくやっていけるか不安もあった。しかし、バンコクに着いてからは毎日が楽しく、プログラムがしっかり組まれ、授業も目的が明確で、2週間があつという間に過ぎた。観光だけだった前回のタイへの訪問とは違い、二回目の訪問は語学の勉強を始め、歴史文化の紐解き、そして異文化理解を目的としたため、日本に在住している外国人として視野が広がった。それだけではなく、日本とタイ両国のことについてより深く理解でき、今まで思っていた視点を覆すような物事もたくさん体験した。以下、特に印象に残ったことを挙げたい。

まずはこのプログラムについて。このプログラムは、京大生がタイの大学生と現地で交流を深め、国際性を養い、語学力を向上させる機会を提供するために実施されている。語学学習、現地学生との共学、フィールドトリップ、タイフードを楽しむ会などカリキュラムはとても充実していた。ほとんど毎日タイ語の授業があり、放課後は駆け足でたくさんの観光スポットを回っていたので少し疲れた。しかし、授業で学んだ言葉その場で運用することができた。それにアユタヤやワットプラゲオに行った時には歴史学を専門とする先生に同行して頂き詳しくタイの遺跡や歴史文化について説明してもらったため、それこそサマースクールに参加した意義があった。また、若いうちに海外経験を積んでいきたいと思っている大学生の後押しとして、京都大学から資金面でのサポートやアドバイスなどの幅広い支援もたくさん受けた。他に、優秀な日本人学生を対象に設けられた JASSO 奨学金もあり、学生に対する資金面、制度面でのサポートが充実しているため、国際理解を深めたい、国際的人材になりたいと思っている大学生は大学からのバックアップを受けることができる。私の場合、JASSO 奨学金に申請できなかったが、授業料や航空券代の一部は京都大学から補助してもらったので、少ない自己負担で、お金で買えないかけがえのない宝物を手に入れることができた。

次に海外での経験について。タイは日本製品や日本文化などに親しみを持っており、日本人に対しては非常に友好的と言われている。江戸時代にはアユタヤに日本人町が栄え、現在でも日本の皇室とタイの皇室の交流も盛んであることがわかった。それに日本語を学んでいる人や日本語が上手な人も

たくさんいることに驚いた。タイ人と中国人は共通した価値観や考え方を有しているため、中国人の私にとって、それほどのカルチャーショックを感じなかったが、新しい発見もたくさんあった。自分が知っていることはほんの一部に過ぎないと実感し、今まで知らなかったタイの素晴らしさをたくさん発見することができた。物価が安い、値切りがよくある、貧富の格差が大きい、屋台が多い、人々がフレンドリーで親近感を感じやすいなど、タイは中国に似ているところが多い。他方で、タイは仏教の信仰が篤い、他国への受容度が高い、微笑みの国というイメージが強い。他の国の良いところを取り入れ、自分の国の素晴らしさを世界に発信するために様々な面で工夫しているなど、中国は学べべきこと、反省すべきこともたくさんあるではないかと思われる。相手の良いところを取り入れ、自分の短所を補う。これこそは人と人、国と国が末長く付き合うためのルールだろう。

最後に学習成果について。このプログラムに参加する前に京都大学でタイ語の授業を受けていたので、初級レベルのタイ語がわかったが、実際にタイ語を運用する機会があまりなかった。そのため、本当にタイ語を話せるかどうか自信がなかった。このプログラムにおいて、タイ語で現地のタイ人と会話でき、わからない言葉があったらその場で教えてもらえたので、授業で学んだことをアウトプットでき、より効果的に語学スキルを向上させることができた。また、日本人の大学生とずっと一緒だったので、日本語力を磨き、日本人と仲良くなるまたとないチャンスだった。

今までの私は、将来何をやっていけばいいか迷ってばかりいて、自分が当たり前だと思っていた考え方で物事を見ていた。このプログラムに参加して初めてそれは間違っていたと悟った。やはり、どの国のことについても、自分の目で確かめ、自分の心で感じ取ってからでないと真に理解することはできない。知らないことに触れ、言葉の障壁を越えられた時の喜びは今でも忘れられない。タイ人の明るさや世界を知ろうとする積極性は今でも覚えている。知らないこと、するべきことも多いかもしれないが、新しいことに挑戦することで、自分の中で進めていくべきことがだんだん見えてきたような気がする。今の自分は、以前よりも前向きになり、度胸がついた。世界から受け入れられるためには待っているだけで何も得ることはできない。自らチャンスを掴もうとする姿勢が必要不可欠である。このプログラムでの経験が自分の人生の財産となり、将来、必ず意味あるものになると確信している。